日本心理学会第60回大会発 表論文集, p.672（1996）

日本語でのスプーナリズムの実験的誘発（1）

伊藤美津紀　　仁平義明　　本吉勇
（北電情報システムサービス）（東北大学文学部）（東北大学文学研究科）

スプーナリズム(spoonerisms：頭音転換)は、二つ以上の単語で頭音どうしが入れ替わる言い違いである（たとえば、“暑い夏→なついあつ”）。ここではpriming法の一種Bias法（Baarsら、1975など）による日本語でのスプーナリズム誘発実験を行い、とくに発語の反応時間を測定し、その背後の過程を探ろうと試みた。

＜実験1＞

二文字の語で語頭語尾の入れ替えのエラーを実験的に誘発できるかの実験。独立変数は、①語の表記（漢字・ひらがな）=被験者間要因、②刺激語の特性（転換されて有意味語か、無意味語か：若（わか）→川（かわ）or 海（うみ）→（みう）など）。③先行バイアスの有無（刺激語が転換したとき同頭音になる語が刺激語に先行して何語与えられるか-0または2）。刺激語数は、リスト中に各10刺激ずつ、計40刺激。

方法：被験者には、2音節刺激（漢字一文字または平仮名2文字の語）がディスプレイ上に、1刺激900msec.、ISI=100msec のペースで提示された。1文字は視覚約0.8度。被験者は、途中beep音が鳴り指示マークが出たら、前に出ていた語を思い出して、できるだけはやく大きな声で答える。被験者は漢字条件、ひらがな条件各大学生12人。刺激語数は177語からなるリスト中に各条件10刺激ずつ計40刺激。

結果と考察：（1）スプーナリズム様のエラーは、部分的なエラーが、「ひらがな」の「バイアス有り」の条件で1回出現したのみ（はし→し（は））。

（2）漢字1文字条件で、バイアス(priming)は、刺激が転換されても無意味な場合には、ＲＴを有意に短縮させた（有意ではないが、ひらがなも同方向の結果）。これは、バイアスによって刺激語の構成音が活性化され、かつ競合する語が実在しないためであると考えられた。

＜実験2＞

方法：日本語の5音節の文・語（たとえば、“赤い和紙（→わかいあし）”）で、スプーナリズムは、それに先行するバイアス（たとえば、“笑う姉”）によってどの程度誘発可能かを検討した。独立変数は、前実験と同じく、表記法（漢字仮名混じり・ひらがな）=被験者要因、バイアスの有無（0,2,3回の3通り）、刺激の特性の3要因。被験者は各条件につき大学生12人ずつ。1リストを構成する刺激数は、バイアス2回条件で177刺激、バイアス3回条件で197刺激。

結果と考察：スプーナリズムは、他の条件をこみにすると、漢字仮名まじり条件では、誘発例が1例のみ、ひらがな条件では5例。どちらかといえば漢字条件の方がスプーナリズムが発生しにくい傾向はあるものの、いずれにしてもアルファベットでの誘発率に比べ低い。ＲＴは、バイアスがある場合、転換すると無意味になる刺激では反応潜時が短縮される方向にある（ただし、有意ではない）。

＜総合的考察＞

日本語では、とくに漢字1文字条件では、語頭語尾の音のつながりは、かなり強固で転換エラーは生じにくい。また、漢字仮名混じりの語文でも、語文の結びつきは強固でスプーナリズムは生じにくい。しかし、ひらがなであっても、誘発される率は低い。これが日本語の特質か、あるいは、バイアスの弱さによるかは、今後の検討が必要である。